

ディアログにおける *au contraire* の論証的な動きについて

田代 雅幸
(筑波大学大学院)

本発表は、*au contraire* の対話的な用例について、その論証の動きを明らかにするとともに、Henning Nølke のポリフォニー理論、ScaPoLine を用いた記述を試みるものである。

ScaPoLine (théorie scandinave de la polyphonie linguistique) とは、Nølke 独自のポリフォニー理論である。ポリフォニー理論であるからして、ScaPoLine も言語の多声性をラングのレベルで記述することを目指すものであるが、ScaPoLine の特徴はこのような言語現象を全てラングのレベルに押し込めてしまおうとするのではなく、ラングのレベルとそれ以外のレベルをしっかりと区分していこうとする理論になっているところである。そして、言語の論証的な側面を記述するにあたり、この理論を用いてラングのレベルで行なわれていることをしっかりと見定めることが、ひいてはパロールのレベルで行なわれていることを見定めることにも繋がるものと考えられる。

以前の研究で明らかにしたように、新聞記事等のモノローグ的な用例において、*au contraire* の用法は大きく2つに分けることができる。(1)は前項に却下を含む論証タイプであり、(2)は前項に却下を含まない非論証タイプである。

(1) Paul n'est pas adorable. *Au contraire*, il est parfaitement détestable.

(2) Une voix de soprano produit une variété de sons très aigus[...]. Une voix de ténor est *au contraire* très grave[...].

この2つの用法の観察から *au contraire* は、問題となっている叙述の対比に極端な対立を持ち込む機能を持っている、と分析することができる。論証タイプと非論証タイプの違いはこの対比される叙述の関係性の違いに起因するものである。

本発表では、モノローグにおけるこの分析から、より対話的なディアログの用法がモノローグ用法の論証タイプと連続性を持つことを示すとともに、この2つに共通する論証の動きのシエマから、ScaPoLine を用いた記述を試みる。

[付記]この研究は、現在進行中の日本フランス語学会研究促進プログラム「パロールの言語学」の一環で行なっているものである。